

新しらい佛敎雜誌

浄土

三・四月號



法然上人鑽仰會發行

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十三年三月廿日印刷 昭和二十三年四月一日發行

第十四卷

第三號

善人は善人ながら念佛し

悪人は悪人ながら念佛して

只生れつきの儘にて念佛する人を

念佛に助けささぬとはいふなり

——法然上人——

目次

時代のもがきを救ふ信仰……………(三)

中村辨康

春の日……………(六)

吉田絃二郎

宗教隨想……………(八)

吉原元明

伸びる少年手にすなたばこ……………(五)

兼子達門

新佛教議論……………(一〇)

B N 生

信仰相談……………中村辨康(二)

童友たち……………(一四)

瀧川駿一

編集後記……………(一六)



時代のもがきを救ふ信仰

中 村 辨 康

御承知のように法然上人の浄土教は、平安藤原末期の社會不安と風教頹廢とを克服しようとする時代のもがきが、遂に法然上人をして無血の宗教革命へと突進せしめたのでございます。

それは思想的に云えば遊戲から眞實へ、理論から實際へ、迷信から正信へ、存在觀的執着から生命觀的躍進へと轉換したのであります。

然しながらその時の新興武士階級は莊園體制を擴充して封建政體の下に夫々領地を占有しつつ個人主義的傾向を強めましたから、折角法然上人が國民思想の上に確乎たる根據を與えましたにも拘らず、再び舊來の存在觀的思想へと戻りさせてしまいました。

それはまた止むを得ない人間の弱點でございます。人間には「我」と云う觀念があつて、それが常に「常樂」を要求して居るからであります。「常」とは「存在觀念」であります。それ故「我」のことを「常一主宰」の義と

も云います。私達の考えて居る「我」は無論唯一なものであり、常在するものであり、何時でも主宰の地位に居たがるものであるであります。されば私が常在するが如く私に關係する一切も亦た常在するものイヤ常在すべきものと執着して居りますから、そこに色々な考えや觀念が、ともすれば「常在觀」となり「實在論」となつて行くのであります。それ故にこそ人生には色々な混雜があり葛藤が出来るのであります。道徳理論然り、哲學然り、宗教も亦た然りであります。

承りますところ依ると、近頃の文藝作家の傾向は今までの客觀的描寫から全然異つた主體觀的描寫言い換えれば自分の内部的なものへの掘り下げをするように變化しつつあると云うことであります。隨てそこには宗教が考えられ自己完成が考えられるに至り、就中、基督者の進出が目立つて來たと云うことであります。

これは明かに一部インテリケンチヤ階級が宗教的にな

りつつある證左であつて誠に喜ぶべき現象であると存じます。

然し私達の經驗に依りますと、之は信仰過程の上では最初の求道時代の精神状態であります。それ故これをもつと掘り下げて行つて貰いたいのであります。文藝は宗教ではないから宗教の熱は急激には出ないかも知れませんが、人生觀を基盤とする限りそれは廣義の宗教で無いとは云われません。

この傾向はそれがたとへ一部であつても非常にほほえましいことでもあります。

然し一方には毎日の新聞でカツパライやドロボーや殺人などが益々多くなりつつあることを語つて居ります。何と云う淺ましいことでしょうか。道義は頽廢し道德は地に墮ち暴虐な殘忍な氣持がグングン擡頭して來ました。これらは國民に教養のないこと、宗教のないことを語るものであります。

その上一方にはまた爾光尊だの何とかの道だの何だかだと色々な類似宗教が流行するのも、宗教の名を借りた物欲の變形ですし、國民が眞の宗教が何であるかを批判するだけの素養を持つて居ないのです。物欲我欲を満足させることをエサにして居る類似宗教は、十萬圓百萬圓の當選を賣り物にして居る富籤と何處にへだたりがあるのでしようか。

佛教各教團に於てもさうです。どの宗も皆な多少の争いをして居り、何れも分裂の氣勢を示して居ります。皆な信仰を見失つたからです。中には遺跡をメツカのようにすることをして以て信仰の如く考へて居るものもあるようですが、眞の信仰を知らない自分の哀れさを告白して居るものであります。

開祖の遺跡を尊敬することは、宗教に附隨した著しい現象であることに異論はありませんが、だからと云つてそれが直ちに信仰であるとは言われません。

回々教では遺跡參拜の巡禮を以て五個の信條の最大なるものと考え、南洋あたりの人々はそのことを終世の念願にして貯蓄してさへ居る有様ですが、それ等の人々の間には眞の信仰はありません。未開宗教の域を脱しない迷信固執の信仰をも亦た眞の文明宗教の信仰なりと考えてはなりません。

かかる二三の觀點からも正しい信仰が何であるかをよく吟味する必要があると存じます。

時代はもがいて居ります。之を救うものは宗教であるとはよく人は云いますが、唯だ漫然と宗教であると云つたつて駄目であります。その宗教の信仰が何であるか、そしてその信仰が果して正しい信仰であるか何うか、その信仰の正態をよくよく正視して、眞の信仰を把握しなければなりません。この意味に於て法然上人の宗教を充分味つて頂きたいものであります。

伸る少年手にすなたばこ

兼 子 達 門

伸る少年手にすなたばこ

吸へば身の毒智慧のどく

誰だつて赤ン坊時代から煙草を吸つて居た譯でなく、青少年時代に友達にすゝめられたり、または眞似をして見たりしてさんざん苦勞しつゝのみなれたものですが、癖になつてしまふともう病みつきになつて容易なことではやめられません。

煙草は元と未開人の宗教儀禮用のもので、酋長以外には手にするこゝとが出来なかつたものとか聞いて居ります。お祭りの儀式の時、之をのむと心が朦朧となつて宛かも神の世界に遊ぶが如く感ぜられるから酋長以外には之を許さなかつたのですが、文化人が之を知り之を犯し初めると遂に日常の嗜好品にまで墮落してしまつたのです。だからその罰で文化人は中氣になつたり神経痛になつたり狭心症になつたりするばかりでなく、年の行かないものが之を犯すと智慧の發達をとめさせられて、折角伸び行かんとする天才的知能をあたら平凡なものときせられてしまふのであります。

煙草が嗜好品になつて一旦癖づくとも中々やめられなくなるのは、煙の中にあるニコチンが、唾液に交つて胃の中に入り、血液に吸収され

てその血液が循環に依て腦の或る皮質を刺戟すると、その部が麻痺します。そこに快感を感じるから、そのニコチンの若干が血液の中に交つて居る間は絶えずその部分が刺戟され、ニコチンの補給をしなくてはよいが、その氣がなくなると、腦の方でニコチンを要求し初めます。それでまた煙草を手にする事になるのですが、それが度重なるに隨て腦の發達を阻害するばかりでなく、血管を勞費して動脈を硬化せしめ色々な老人病の原因となるのだとのことです。

それ故成年の人々にさへよくないのは知れ切つたことですが、況して青少年のこれからと云ふ人々に取つては大毒であり大害であります。願くは世の青少年よ。一時的な嗜好にだまされず、深く考へ遠く慮つて、若し手にして居たならば好きにならないうちに煙草を捨て、頂きたいと熱願いたします。そしてまだその味を知らない方々は絶対に之に手を觸れないことを衷心からお願ひいたします。是からの日本の爲に！新らしい時代への希望の爲に！

誌代の値上について

諸物價の高騰でどうしても五圓が維持できず七圓か八圓か何れにするか迷ひましたが少しでも安い方がよいからと印刷所と相談の上漸く七圓にきめました。何分よろしくお願ひします。ハガキで八圓と申上げた方もあります。が御訂正下すつて此急場をお救ひ下さい。

新 佛 教 講 座

靈 魂 と 云 ふ も の

家を建てますのに、土臺とか柱とか梁とか棟木とか瓦とか色々な、木や竹や石や土などの材料を集めまして組立てますが、それら諸材料の適當な組合せが出来上りますと、そこに「家」と云ふ觀念が成り立つばかりでなく、事實上そこに「家」と云ふものの機能が働き出されるのであります。

古歌に「引き寄せて結べば草の庵なり解くれば元の野原なしにり」と云ふのがありますが、全くその通りでございます。

人體に於きましては亦た然りでありまして、佛教では四大とか五蘊とか云ふことを申して居ります。四大とは地水火風の四つで地とは固いもののこと、水とは濕氣のあること、火とはあたたかみのあること、風と

は動く力のこと、大とは物の要素を大きく分けた元素のことで、この四つの要素に依て人體が出来て居ると云ふのであります。又五蘊とは色受想行識の五つで、色は物質即ち人にあつては肉體をさして云ひ、あとの四つは心をさして云ひます。即ち受とは感覺すること、想とはその感覺に依て物を「想ふ」こと、識とはそれが何であるかを分別し意識すること、また行とは受から識までに至らせる心の働きであります。そして蘊とはそれら同類のものの「あつまり」のことでこの物質と心の働きとで人が出来て居ると申します。そしてそれにはまた人としての複雑な機關の働きを、赤ン坊時代から段々に生成させまして、自分と云ふ考へや、または色々な欲望などを造成しつつ、順次にそれらの考へをかためさせて居るものでありまして、初めから個在して居るものとなないことを教へて居ります。

また私達人間が未開時代にまだ自覺を生じなかつた時、不圖したことからこの精神作用を不思議な力と感じ、そこに「精靈」と云ふ宗教意識を考へ出しましたが、之は文化が進んで高等宗教になりました。靈魂としての基礎になつて居るものでございます。

そして人が死ぬとその靈魂はからだから遊離して靈界に生活するかのやうに考へ、更に後になりますと、もつと發達してそれに道德的な考へを加て信仰なき惡人は地獄に墮ち、信仰ある善人は天國に生れると云ふやうに、判決することにさへなりました。多くの宗教は大概この考へを持つて居るやうであります。

ところが佛教の純粹な考へでは、一寸お斷りいたしますが玆に純粹と云ふのは御承知のやうに佛教は二千何百年來の永い間に色々な思想が附け足されて参りまして、全く逆な考へさへあるのでありますからそれら後になつてから附隨して來た考へを捨てて、本筋の本質的な特色とするところを申し上げますと、それは私達が日常に物を「存在」として見て居る、その考へ方は間違ひであると否定して居ることでもあります。この存在觀念こそ迷ひの源であり執着の根元であります。されば、この「物を存在としてのみ見て居る」私達の世界のことを「三界」ともまた「三有」とも申して居ります。「三有」とは即ち存在觀念を基礎として出來て居る、三つの世界のことでもあります。

即ち物質の世界と物質以上の觀念界と欲の世界との三つでありますが、これは『有』即ち存在を基盤としていつしかそこに執着を生じ諸欲を起して居るのであります。然るにこの三つの世界からあくまで抜け出ることが佛教の目的とする出離解脫なのであります。かの西國順禮の笠に「迷故三界城、悟故十方空」と云ふ文句が書いてありますのもそれを意味するものであります。

随つて佛教では個在的な我と云ふ考へを認めません。また個在的な靈魂と云ふものをも考へては居りません。

(7) かう云ひますと、それでは「靈魂は無いのか」とすぐ反問したがりますが、その「有」に反對する「無」と云ふ觀念もまた「存在觀念」であつて考へてはならない考へであります。「有」と云ふも「無」と云

ふも共に存在に就いての觀念であるからであります。つまり有無共に邊見であつて「離邊處中」と云つて有無の二見を離れて中道に處するのが本當であると云ふのであります。

抑も「存在」とは單に空間に置かれてあるところの物の抽象的な考へであります。何となれば時間の伴はない空間的存在と云ふものが世の中にあるでありませうか。事書は空間的に考へるよりもむしろ時間を主にして考へなければなりませんのに、私達はその大切な時間のことを打ち忘れてしまつて唯だ空間に物が存在するとのみ考へて居るのであります。

人間の壽命にしてもまたそうであります。何か「壽命」と云ふ特別なものがあるのではありません。實には刻々に過ぎ行く一息一息の時間の集積がそれであります。唯だそれに若干時間の持續的制約があるだけであります。それ以外に何かかたまりがあると考へてはいけません。

二

元來靈魂と云ふ考への中には支那の魂魄思想が餘程に含まれて居るのであり、それがまた私達を迷はして居る種であります。魂魄と云ふ肉體や心とは別の何かちがつたものがあるやうに考られて居ります。即ち人が死ぬと、魂の方は陽で天に歸り、魄の方は陰で地に歸ると申して居ります。それは元と元と人體が母體に宿る際に天からは魂が來

地からは魂が来て合體してそこに完全な人となるのであるから死ぬときにはまたそれぞれ元の處へ歸るのであると云ふのであります。

この考へは靈魂を天地に歸せしめるのであり、個在的な魂を認めて居ないのでから、餘程進んだ靈觀ではありますが、それでもやはり存在的な考へからは抜け切れて居りません。

然し人體を離れてからの私達の靈魂は何處に行くのでありませうか。多くの宗教は靈界を豫想して居りますが、一體靈界は宇宙の何處にあるのでありませうか。靈界は個在的なものでなく觀念的に宇宙にあまねく廣がつて居るのであるとしますと、それでは個在的な靈魂の居場所がわからなくなつて參ります。個在的な靈魂を認める限りに於ては靈界もまた物的存在として宇宙の何處かにあらねばなりません。

これは信仰的觀念としては考へられても實在して居るとするとどうしても矛盾が出来て來ます。こう申しますと、或はそれでは人間の行爲には責任がなく死ねば一切御破算になるではないかと批難する人もありませうし、また佛教にも個在的な一神的信仰があるではないかと反問する人もあらうと存じます。

之に對しては先づ「死ねば御破算になる」と云ふ考へは、これ亦た「無」と云ふ存在觀が然らしめた考へです。決して御破算になるものではありません。即ち社會に影響し子孫に影響いたします。例へば今度の戰爭を御覽下さい。一部の指導階級が仕出かした戰爭でありますけれども、その影響は獨りその人達の上のみあるのではなく國民全體

に強く影響して居り、更にこれから生れて來る將來の人々にまで強く影響して、色々な苦しみを受くべく約束されて居るのであります。私達の行爲の問題も他に無關係な個在的なものではありません。私達も周圍から影響を受けて居る代りに私の行爲も社會に影響し大きくは國民全體に多少の影響を與へて居ることを御考へ願ひたいのであります。しかもそれを克服すべく私達及び私達の子孫は、今後幾年も献身的努力をつづけなければならぬのであります。

また次の問題も存在觀を基礎にした批難であります。汎神的である佛教に一神的なものがあるのは確ですがそれは純粹な一神教とは大いに違ふのであります。たとへば阿彌陀佛の信仰の如きがそれでありまゝす。一切の現象は單なる原因結果の關係のみでなく横の複雑多岐な關係に依て、刻々に變化して居るのであります。随つて固定したものは一つもないのであります。このことを「緣起」と云ひます。緣とは條件のこと、起とは現象して居ると云ふことであります。即ち色々の條件に依て物は刻々に變化しつつあると見得る人は宇宙の實相を素直によく見て居るものと云はれて居ります。ところがこの一切の事物が變化しつつある中に於て常に一定の状態をたもつて居るものが二つあります。それは時間であり空間であります。しかも此の時空は二にして一なるものであります。特に時間を中心として考へなくてはなりません。さればそれを「宇宙の大生命」と云ひ、また「かきりなき壽」とも云つてもよいのであります。即ち「無量壽佛」と云ふのは、その

人格化の名であります。随つてこれは汎神の一神であつて個在の一神ではありません。

しかも私達の小生命は此の天地の大生命から分けられたものであります。だからこそ自分とも云ひます。それ故に私達の命は正しく阿彌陀佛の無量壽の中に歸一すべき性質のものでありまして、個在的に魂としてフワフワして居るものではありません。大生命の中に往生して

初めておろつくことの出来るものであります。されば有るとか無いとかを考へるのは私達の個在觀的迷想であります。いくら論じましても空中樓閣に過ぎないことをよくよく悟るべきであります。しかもこの問題の實際的結論としては、大生命の中によりよく生きてよりよく落ちつき與へられた使命に専心することあります。そしてこれが本當の靈の解決であると信じます。(B・N生)

新刊

中村辨康著(浄土叢書第一輯)

法然上人とその信仰

菊半截八十頁

定價三十圓(送料五圓)

長らくお待ちたせしましたが漸く印刷が出来ました。目下製本中です早く御申込み下さい。

本書は法然上人の全貌を遺憾なく表現すると共に、その教義が他教と異つた特色を摘出すると同時に、佛身佛土に就て、特に力を入れ極めて新らしく、然かも常識的に現代人の誰でもに納得の行くやうに説かれて居ります。

本書に依て初めて法然上人の浄土教が如何に正しい宗教であり、科學にも抵觸せずまた佛教の高遠な哲學をも裏付けして居る信仰であることが明瞭になります。

浄土の教を知りながら然かも何が知らあきたらぬものを持つて居られた方々も、本書を見ることに依てスツカリ明るさを感じることが出来ます。

長い戦争に依て信仰を見失つた方々も本書に依て新らしくシツカリした信仰を取り戻すことが出来ます。

東京都港區芝公園二ノ一

發行所

法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番

(振替御利用の方は必ず手数料一圓五十錢御増額の上御送金下さい)



宗 教 隨 想

吉 原 元 明

(1)

或人は神社宗教はつながりの宗教、キリスト教は救ひの宗教、佛教は悟りの宗教と云つて居る。神社は氏の長が祖先を神として祭り後に地域的に氏神として祭事を爲すやうに成つたものでありキリスト教は慈善鍋だの養老院孤兒院等の社會的不幸を救ふ點で救ひの宗教と云へるし、佛教は成程生死一番、自心を破て大我を體得する所、一つの悟りではある。

之は三者の宗教を或角度から見で一應の説明をした迄であつて克明して云ふたら色々の言い分があるであらう。私はそれを詮議だてして議論遊戲に墮入りたくはないが、佛教を悟りの宗教と云つて終つたのでは他力大信の宗教の一面がかくれてしまふのでないかと思ふ。それは私共の現實は愁の斷ち切れない淺ましい凡夫だから、私共に取つて大死一番死んで生きると云ふ事は單に理論として云ひ得ても實踐が伴はないのである。それ故には彌陀大

(2)

悲本願の力が非常に強く魂に響くのである。佛の道に入るには悟りの自力で入るのと、佛の大悲を凡夫の自覺から知つて入るのと二通りある。單に佛教を悟りの宗教と云つてしまつては此の凡夫が救はれてゆく他力の信仰の面が忘れられてしまふであらう。

宗教とはどんなものかと質問する青年が此頃多くなつた。之れも時代の反映であらう。

此の質問に對してどんな風に答へたら納得して貰へるかと思へると相當むづかしいやうに思ふ。學問的に色々の説を拾ふて列擧して見ても反つて逆ふばかりで所詮のない事である。それ故質問者の心持を察してそれを二つに分けて御話したい。

これは一は宗教其ものゝ説明と他は信仰に入る方法をとの二つの意味が含まれてあるやうに思ふのである。

始めに第二の信仰に入る方法からと云ふと、信仰に入るには現

實の自分を自覺する事である。此の現實の自分を知る事は易い様でなかなか易くない。御互ひに我慢がありうぬばれがある。執着も深い。人の善惡は知り易いが自分の善惡は分り難い。此點に充分理解を持ち虚心坦懷自分の現實を見た時に、眞實人間の弱さに驚き且つ罪に悲しむ。どうしようもない自分の弱さを自覺した時燃え上つてくるのが唯だ彌陀大悲の御誓ひの大願業力である。之は理論でなしに事實である。迷ひの凡夫には御佛の大悲が信念の象徴として思はれて來るのである。かくして私達は自然に佛の慈悲の懷ろに入るのである。

第二に、宗教とは何かと云ふ宗教其ものを説明すれば、宗教は一如の世界である。佛の境地は慈悲平等の大精神と申すより外にはない。私共の生活は常に個人的であり功利的である。道德の生活を反省する時、常に對立的相對的の枠内にあるのである。だから力の桔槔は免れないのである。眞實の生活は平等博愛でなくてはならない。宗教は私共の生活を指導し私共の生活を意義付けるものである。

社會を淨化し世界を平和にするには眞實の生活を心がけてゆかねばならぬ。此の意味において宗教は私共の生活をうらづるけ力である。日々の生活が報恩感謝であり歡喜努力であり理想向上の精進力であつてこの大精神を把握すれば理想生活其ものである。

私共の生活は宗教生活でなければならぬ。宗教と生活とが遊離するのでなしに生活の内面は宗教であるべきである。

(2)

ものの完成には決心と苦心と熱心とが在る。

今日新聞を見ると、ガンヂー翁がヒンズー青年教徒に殺された由である。巨匠は疊の上では死なない。

ガンヂー翁は世界人類の光明であつた。翁の死はインドの悲しみと損失だけではない。世界の悲しみと損失とである。彼の一生は印度の獨立と平和とにあつた。遂に印度獨立の大業を完成し七十八歳を以て此の世を去つた。無抵抗主義を貫いて世界人類の救済に立つた。彼の無抵抗主義は單に武力排斥ではない。其の内面には燃え上つた一大信念があつたのである。それが今日の巨匠を爲し世界からをしまれたのである。

ものの完成は決して簡單ではない。永劫つきざる輪廻の凡夫を救ふ如來の無極大悲の親心は、私の心にとつて非常に力強い歡喜と感謝とを充ててくれるのである。偶々私はこの巨星の地におちたのを知つて寂しい思ひが起り、佛の大悲に合掌したのである。

ほめる人、そしる人、どちらも長く世間に生き残る者はない。誰に耻ぢ誰に知つて貰ふつもりか。そんなことに何の必要があらう。もう少し永遠を考へたらどうだ。

信仰相談

信仰上の悩みや佛教についての疑惑にお答えします

中村 辨 康

入信の自覺の有無について

(問)

或る有名な人ですが、某處で講演された時世間には自分の信仰に入つた月日をハツキリ「何月何日に入信した」などと云う人があるが、そんなのはおかしいことでインチキか迷信かに過ぎない」と云はれました。若しこのお方の説が正しいとすれば正しい意味の入信と云ふ自覺はないことになりすが如何なものでせうか。御教示下さい。(愛知・額田 下山・淺井生)

(答)

信仰と云ふものの考へ方に依て異なるかと存じます。また聖道門流に云ひますと「轉迷開悟」を以て入信と云ひますが、之ですとたとへば禪宗のやうなのは「見性」し得た日を以て入信の自覺と云ひ得ませう。また天台眞言等では觀法の成就の日を以て入信の時と云ひ得ませう。また、淨土門に於ては眞實に如來様に「南無」し得た時、言ひかへれば如來

様の大慈悲をシミジミと體驗し得た日時を以て入信時とすべきでせう。然しこれ等は極めて少數の人に限られて居りますから、一般的に誰でもさうあるべきであるとは云へません。

また宗教と云ふものにも色々あつて佛教や基督教の如き歴史的文化的宗教ばかりでなく、未開人の宗教も現に行はれて居り、隨て宗教學者は宗教に對して色々な定義を與へ宗教心即ち信仰に就ても色々云つて居りますから、或は御質問のやうなことも云ひ得られるのかとも思はれます。

然しながらかう云ふ學者達は大概自分に經驗を持つて居りませんから、理論を云つたり推論をしたリして居て、信仰の核心に觸れることがありません。しかも大概は自説に固執して正しい入信の經驗をも「迷信的なもの」と片づける嫌ひがあります。ですから學者と

云ふものは多くは理論や推論に依るもので、事實に適合しない場合が相當に多いと存じます。それ故一から十までそれらの説を是認することは出来ません。

但し、先年の光明主義では「見佛」の事實を目して入信と云ひましたが、抑々その「見佛」とは何であるかと云ふに、多くは「見像」でありまして精神訓練に依る宗教的一現象に過ぎませんし、やはり存在觀の裏付けを以てあらはれて來るものですから、嚴密の意味から云ふならば、その學者の云ふ如く一種の迷信とも云へませう。然し見佛と云ふものにも實は色々な現象があつて一概には云へません。禪宗の見性と同一狀態もあるし、一遍上人や徳本行者などが歌で表現したやうな狀態のこともあつて、謂ゆる「物心不二」とか自他一體とか天地同根とか光明遍照とか云ふことを如實に經驗する場合もあつて、必ずしも迷信的なものとはばかりは云へません。第一そ

れに依て心の置きどころが變り、生活に對する考へが變つて來るのであります。然しこれらは或る相當時間の精神訓練(中には短時間の人もあります)を要するので一般的に誰でもと云ふことは出来ません。一般的でなければ、それは特殊的宗教であるから普遍性がありません。そこに聖道門は勿論淨土門でも「見佛即入信」を主張する流儀は純粹な普遍的宗教とは云へません。少くとも、それは法然上人の念佛門ではないと思ひます。法然教義では「念佛だに申し得れば」よろしいのです。心から「南無阿彌陀佛」と如來様に歸命信願が出來ればよろしいのです。ですからその心になつた日時を以て入信の自覺としてもよいし、自然に順次にさうなつたならばそれでもよろしいのであつて、必ずしも劃一的にその人の説の如く限定することはないと思ひます。とかく宗教には獨斷と固執とが有り勝ちなものでありますが、こ

れは餘程注意しないといけません。ことに指導者の地位にある學者はこう云ふことに依つて往々に

して世をあまり人を誤ることがないとは云へないからです。御留意下さい。

信仰と克己心、信仰心と執務

(問)

誠にぶしつけですが、私の數年來の疑問です。御教示願ひます。これが爲に神経衰弱見たやうにさへなつて居ます。また場合に依ては克己心が失はれて不節制を平氣でやることがあります。他力に委かせれば自制はいらない氣持になるからです。それ故念佛の中に克己心が養はれないものか何うか。それを教へて頂きたいのです。また念佛をし乍ら仕事をせよと云はれるが、實際問題として念佛しながら計算ごとなどしますれば注意力がにぶつて間違ひだらけになりますし、讀書なども出来るものではありません。故、自然その時には念佛が失はれます。ですから或程度念佛をあきらめなくてはならぬと存じますがこの念佛しながら仕事が完全に出來ること、及び他力に委かせ乍らも克己心が養はれること、この二つの矛盾が解消されるやう御教示をお願ひいたします。(静岡市・西草深・望月保正)

(答)

先づ初めの問題ですがこれは他力と云ふものをばきちがへて居られるからです。他力とは天地の大生命力に基いて立てられた「大願業力」でありますから、他力に隨順するとか本願に乘托するとか云ふのは、天地大生命の流れに順應することであります。既に大生命の本流に順應せんとする心になれば、努むべきを努め、果すべきを果さなければならぬ氣持になります。それが正しい生命の流れに順應するものだからであります。然るに若しノホホンにかまへて横着の心から爲すべきをなさず努むべきを努めなかつたならば、それは生命の流れに逆らうものであつて、本當の歸命者ではありません。むしろ墮落せる信仰に落ちて居るものです。法然上人は「五逆十惡のものも生ると信じて少罪をも犯さじと思ふべし」と云はれました。この「逆惡の者も救はる」と信ずることに依て惡心がなほり善心が生れて來るの

が順當でありますから自然に克己心も強くなるのが當り前であつて段々克己心が弱くなると云ふのは今迄のは本當の信仰でなかつたと反省すべきであります。

次に念佛をしなごらの仕事は出來ないと云ふことは、是れ、亦た「念佛」を「唱名行」にのみ限定して居るところの「形式」と「信念」とをゴツチャにして居るからであります。正しい信念は常に如來様が私の生活の中心となつて居ることであります。唱名念佛はその一部の現はれであります。實には身口意の三業とも悉く念佛になつて居るのが「信の徹底」であります。口を動かして居ることは念佛表現の全部ではありません。我を忘れて仕事に精進して居ることも念佛表現の一部分です。グツス一つ一つの念佛形式です。唯だそこに欲の皮を突破したり邪心を起したりして居たのでは念佛でも何でもあります。反念佛であり非信仰であります。むかし徳本上人に或る人が「上人は毎日何萬遍の念佛をなさいますか」と質ねたとこゝろ上人は「私は念佛し通してである」と云はれたさうです。それは質問

者には上人が念佛して居ない時もあるから不思議に思つて質ねたのですが、上人として見ればたとひ口に上ばせずとも出る息入る息が悉く如來様を念じて居るのであるから、仕事に熱中し、話に熱中して居ることが直ちに念佛意識であると思つて居られたわけですから、仕事に熱中して居ると念佛が忘れて居ると云ふのでは「唱名の外は念佛ではない」とする「形式」に捉はれた考へ違ひであります。口稱の念佛は形式上の最低標準でありますから、それ以上の身體でなす念佛もよいわけで、身口意の三業皆な念佛となるとところに「信の徹底」があるわけです。例へば戀と云ふ心もそれに似たものがありますし、また「我」と云ふ心もそれに似たものであります。即ちそれは心の中心が何であるか決定するものであります。唯だ物質上の「欲」が中心ならば「欲の人」です。し「戀」が中心ならば「戀に捉はれた人」です。し「如來様」が中心ならば「念佛者」なのです。その外部に表現される形式は口稱でもよろしいし、仕事でもよろしいのです。與へられた仕事を如來照鑑の下に至誠を以て行ふことが念佛でない理由は一つもありません。

話	實
---	---

友 だ ち

瀧川 駿 一

1

「西川！　いくぞ」

中村先生が、ノックバットをかまえて、猛に叫びました。猛は腰をおとして、注意ぶかく身がまえしました。中村先生は、きついゴロを、遊撃の右よりにはなちました。砂をかんでボールはとんでゆきます。猛はすばやく進み出るとボールに飛びつき、あざやかにグローブにおさめました。

「うまいぞ」

中村先生は思わず叫びました。

「よろし、もう一ついくぞ。こんどは併殺だ」

またつよいゴロが飛びました。二るいよりです。猛は横つ飛びにゴロをすくいあげると、二るいにトスしました。二るい手の渡邊がすしおくれたために、ボールは地上にころがりました。

「渡邊、おそいぞ。もう一つ」

こんどは一るい二るいの間にボールはとびました。渡邊が猛烈に出

て来ました。

「しつかりつかんで、よしよし、そら二るいへ」

中村先生が一生けんめい渡邊をはげましています。猛はその間に、もう二るいにはいりました。渡邊が二るいへボールをトスすると、猛はシングルで巧みにつかんで、すぐさま一るいへおくりました。きれいな球です。田中のファースト・ミットに見事におさまりました。

「よく出来た」

中村先生はにこにこしています。もう一度つつ、ゆるいゴロが各野手の正面にとんで、練習はやつと終りました。

「西川さんは、うまいわね」

「だつて、うちのピカーですもの」

おとなしい満智子が感心して、誰に言うともなくひとりごとを言うとき、おきやんの英子が、こまつしやくれた調子で答えました。二人は猛と同じクラスで、級長の猛を助ける副級長でした。

「ピカー、うん、うまいことを言うな」

中村先生が笑いながらふりかえりました。英子は得意そうに肩をび

んとはりました。選手たちはみんな中村先生のもとへもどつてきました。

「つかれたかい。明日は試合だから、今夜は早くねて、からだをじゅうぶんやすめるんだ。いゝか」

「はい」

「守備も打撃もたいへん上手になつたから、明日は練習の時の氣持でやるんだね。試合だからつてかたくなるんじゃないよ。」

「はい」

「それじゃ、さよなら」

中村先生の言葉を胸にしつかりおさめて、みんなは歸りはじめました。

「西川と秋山は、ちよつと残つて……」

中村先生は主將の猛と投手の秋山を呼びとめました。そして二人を教員室につれてゆきました。満智子と英子は猛と一緒に歸るつもりにしていきましたので、がつかりしました。

「西川さん、あしたは應援にゆくわよ」

英子は大きな聲で叫びました。

「たのむよ」

中村先生がふりかえつて答えました。猛はにこつと笑つて、手をふりました。満智子と英子は、それを見ると、キャツキャツと笑つて、一つさんに校門の方に走つて行きました。

2

きれいに晴れた日でした。ふき出した木の芽が、目にいたいほど光っています。

中村先生に引率されて、猛たちは相手の學校へ行きました。

去年の試合では猛たちの學校が負けていますので、今日はその復しゅう戦です。猛は主將だけに、昨夜はよくねむれませんでした。しかし朝になると、元氣よく寢床から飛びおきました。

「まあ、珍らしい。朝寢坊の猛がこんなに早く起きるなんて……。」お母さんが、びつくりしたほどでした。

「試合だもん。負けられない試合だもん」

猛はストッキングをはき、ユニホームを着ながら、はちきれるような元氣が、わき出てくるのを感じました。

「勝てるぞ。きつと勝てるぞ」

自信がみなぎりしました。さわやかな朝の空氣を、思うぞんすつて、學校へ出かけました。

相手のチームはさかんに練習をしています。守備はなかなか上手です。投手の球もかなりスピードがあります。

「おい、かたくなるんじゃないぞ。練習の時の氣持でいくんだ。のんびり戦うんだ。」

中村先生は練習を一通り見ると、自信のある聲で言いました。

「昨日も西川と秋山に言つたんだが、みんなは秋山の肩を信頼して、主將の西川を中心に、しつかり守るんだ。西川が守備のかなめだ。いゝか。西川を中心に動くんだ」

中村先生は猛をみつめて、力強くはなしました。猛は責任の重さを感じました。

軽い練習を終えてベンチにひきあげると、満智子と英子が来ていました。

「負けたら承知しないわよ」

元氣な英子が、みんなを見わたしながら、おどけた調子で言いました。

「こわいぞ、こわいぞ。負けると女の子にいじめられるぞ」

中村先生がふざけて答えたので、みんなはどつと笑いました。試合を前にして、やゝかたくなつていたみんなの氣持がやわらぎました。

「負けるもんか。きつと勝つてみせるよ」

猛は英子に自信のある聲で答えました。

「西川さんがそういうなら、安心だわ、ねえ満智子さん」
「そうよ。しつかりやつてよ」
「うん、しつかりやるとも」(つづく)

編集後記

◇大戦終了後わずかに三年にしてはや世界は再び戦争勃発の様相を示している。米ソの対立はチエコ問題から急速に深まり、米國のマーシャルプランの強化、西歐五ヶ國同盟の成立、ソ連の對フィンランド相互援助協約の締結、ベルリンの英米佛列車檢問事件など、世界は今や米ソをめぐつて一步一步破局に進みつゝあるようである。

◇しかし世界は第二次戦争によつて、戦争の惨苦は身に徹して體驗してをり、平和へ對する希望は全人類の胸に燃えさかつてゐる、にもかゝらず、かゝる事態へ進みゆくのはどうしたことであらうか絶體の平和は實現できない單なる理想であらうか。私はそうは思わない。人類の希望は必ず實現するいや實現せしめねばならぬ。平和を愛しそれへの實現に努力する世界の善意を信じたい。米ソの對立

も、人類の希求しているものが平和であることを銘記すれば、解決できないわけはなく、兩國の善意を期待する希望は今や世界に充ちみちている。

◇殊に日本は新憲法で戦争放棄を規定した世界唯一の國である、今こそ強力な平和運動を展開すべきであり、そのみが現在の世界に貢獻し得る日本最大の道である。そして佛教の説く絶對平等の立場武力を否定する廣大な慈悲の精神を昂揚することは、何よりも緊急な佛教徒の課題である、宗教に裏づけられて、はじめて絶體平和が

實現されることを想うべきである

◇都合により三・四を合併號とした、インフレの昂進で定價五圓を維持することはしだいに困難になつてきた、會員諸氏の協力によつて出来るだけ五圓の線を守りたいと思つたが、ついそう出来なくなつて七圓に値上した御諒承下さい

◇時代の動きに應ずる佛教の立場をいろいろと誌上にもりあげたいと思つてゐるが、編集上の意見があつたら、すゝんで忠言をよせていただききたい、會員と一體となつて、本誌を充實させ發展させたいことを念願してゐる。(A)

江上秀靜 文
鈴木壽雄 繪

(B5大判三十二頁
全オフセット六色刷)

法然上人繪物語

定價六十圓
留八圓

新刊
戦後はじめて出た最も美しい繪本です。本會でもお取次します。御希望の方は前金御申込み下さい。

東京都中央区京橋一ノ二

發行所

法然上人繪物語刊行會

「浄土」 三・四月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿三年 三月二十日印刷
昭和廿三年 四月一日發行
(定價七圓)

編輯兼 中村 辨 康
發行人

東京都千代田區神田保町三ノ十
印刷人 春山治部左衛門

東京都千代田區神田保町三ノ十
印刷所 共立社印刷所
配給元

東京都千代田區淺草橋町二ノ九

日本出版配給株式會社
發行所 法然上人鑽仰會

東京都港區芝公園淨土宗務所
振替 東京八二一八七番
會員番號B一〇八〇一四

會費 金九十圓
一ヶ年

(送料六圓を含む)
振替拂込みはすべて一圓五十銭増のこと

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十三年三月廿日印刷 昭和二十三年四月一日發行

浄土第十四卷 第三號

定價金 七圓 (送料五十銭)